



病院ができるよ

ネパール南西部のブトワル市で6日、毎日新聞
社会事業団と国際医療NGO「AMDA」の連携
で建設される子ども病院の起工式が行われた。国
内に小児専門病院が一つしかないネパールでは、
幼児の死亡率が高い。起工式には市民ら2000
人が詰め掛け、子ども病院への期待の大きさを示
した写真、文とも山本泰久。

(21面に記事)

【ブトワル(ネパール)6日山本泰久】みんなの善意が病院になった。毎日新聞の読者からの基金をもとに、ネパール・ブトワル市で建設計画が進んでいた子ども病院の起工式が6日、現地で行われた。1995年の阪神大震災の際、アジア・アフリカの途上国から寄せられた救援に、「お返し」をしようと思った計

ネパールの子ども病院

画が現実のものとなった。

ネパールには小児専門病院が一つしかなく、5歳未満児の死亡率は日本の約20倍。式典には地元の人たちだけでなく、海を越えて多くの人が集まった。

ブトワル市の子ども病院は、毎日新聞社会事業団と国際医療NGO(非政府組織)のAMDA(アジア医師連絡協議会、本部・岡山

市)との連携で建設する。

設計は世界的建築家、安藤忠雄さん(56)が引き受け、日本国内の医師会から医療機器を無償提供する動きも本格化するなど、共感

起工式は午前10時半(日本時間午後1時45分)に始

まり、セレスト・ボーズ・プロサル・ブトワル市長、菅波茂・AMDA代表ら約2000人が出席。地面に穴を掘って石や砂、土を入れる「ネパール版くわ入れ式」を行った。

プロサル市長は「みんなで力を合わせて、病院をさらに大きなものにしてい

形に皆の善意が くわ入れの喜びの

2000人 集い起工式

う」。菅波代表は「この病院が、ネパールの大勢の家族の幸せにつながることを望みます」と喜びのあいさつをした。

の輪は広がっている。建設地は約6・7畝。来年6月には初期工事が完成し、約30床のベッドで部分開業する。運営はAMDAネパールが担当、日本からも医師を派遣する。

また、安藤さんも「日本とアジア諸国とは、経済支援はあるけれど、人々の心の対話がない。今後、仕事を通して目に見えた対話をし、交流を深めていければ」とのメッセージを寄せた。